The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語りと自己 : バフチンにおける自他とクロノトポス
Author(s)	佐川, 祥予
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2019, 23, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71581
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第23号（2019）

語りと自己

―バフチンにおける自他とクロノトポス―

佐川　祥予*

要　旨

本研究では、物語と自己形成の関係に焦点を当て、自己について物語るという行為によって自己が形成される一連の過程をバフチンの著作に拠りながら明らかにすることを目的としている。今日では、物語るという行為が自己や現実を構成するという考え方は広く受け入れられているが、自己を語るとはどのような現象であるのか、語る内容が現実とどのように関係しているのか等について、詳細に論じている研究は管見の限り見受けられない。この点についてバフチンは、自他に関する認識論、クロノトポスを用いた物語世界と実在の世界、といった観点を示しており、物語行為を通した自己形成を考える上で非常に重要な手がかりを与えてくれる。

【キーワード】対話、物語、自己と他者、バフチン、クロノトポス

はじめに

今日では、物語は心理学、社会学、社会言語学、人類学など様々な領域で研究され、観察や実験に基づく従来の研究の枠組みでは捉えることのできなかった人間の営みという観点を研究にもたらし、物語によって構成される自己や現実という考え方も共有されるようになっている（Pavlenko & Lantolf 2000）。第二言語教育に目を向けてみると、個人の物語は分析対象として、あるいは、授業活動として、扱われている。そこでは、当然ながら、個人の物語は、その物語を作成する人と結びついたものとして認識される。物語と自己については、「物語的自己同一性」（リクール1990）、「物語的自己性」（マッキンタイア1993）、あるいは、物語を人間の認識のあり方そのものとして位置づける「物語モード」（Bruner 1986）、「フォークサイコロジー」（Bruner 1990）といった考え方がある。

本研究では、物語と自己形成の関係に焦点を当て、自己について物語るという行為によって自己が形成される一連の過程をバフチンの著作に拠りながら明らかにすることを目的としている。物語るという行為が自己や現実を構成するという考え方は、今日では目新しいものではないが、自己を語るとはどのような現象を指すのか、語る内容が現実とどのように関係しているのか等について、詳細に論じている研究は管見の限り見受けられない。この点についてバフチンは、自他に関する認識論、クロノトポスを用いた物語世界と実在の世界、といった観点を示しており、物語行為を通した自己形成を考える上で非常に重要な手がかりを与えてくれる。

1　語りによる自己形成へのアプローチ

本章では、バフチン研究者であるホルクウィストの議論を手がかりに、自己が語りによって形成される一連のプロセスについて概観する。

ホルクウィストは、まず、自己と他者のもつ時空間が根本的に異なっており、自己は未完結なため、「わたし」という存在が予め与えられていないことを指摘する。

*　大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程、大阪大学国際教育交流センター非常勤講師

知覚する者たちにとっては、彼ら自身の時間は永遠に開かれており終結していない。彼ら自身の空間はつねに知覚の中心であり、そのまわりで事物が配列されて地平となる。その地平の意味は、事物が地平のどこに位置しようと、事物が占める位置によって決定される。それとは対照的に、われわれが他者を形成する時間は閉ざされていて終わりのあるものとして知覚される。(Holquist 2002：22／邦訳1994：33)

他者は完結されたものの領域にあるが、私は時間を、開かれていて、つねに未──完結のものとして体験する。(Holquist 2002：26／邦訳1994：38)

次に、他者と同じように自己を完結したものとして捉えていくほかないことをホルクウィストは指摘する。

私は何らかの方法で、私自身を他者の個別性のようなものをもった主体に形成しなくてはならない。私の「私」は、意味のある受信者になりうるくらい明確な輪郭をもたなくてはならない。(Holquist 2002：27 / 邦訳1994：40)

さらに、他者のように完結し、主体性を持った自己を形づくるプロセスについて言及する。

私を、私自身が知覚できる客体に変えてくれるのは他者の範疇だけなのである。私は私の自己を、他者はこう見るかもしれないと思い描きながら見る。自己を作り出すには外部からそうしなくてはならない。換言すれば、私は私自身の作者となる。(Holquist 2002：28／邦訳1994：42)

物語は、それにより価値を特定の状況で一貫性をもったものに変えるための手段である。この物語性、私の始まりと終わりを全体的生として構想する可能性は、他者の時間／空間において実現される。(Holquist 2002：37／邦訳1994：55)

未完結な自己を他者のような輪郭を持った存在とするため、私という出来事をつくる必要がある。その際、私自身を捉えるために他者の視点を用いなければならないという。そして、自己を描く際の形式としてホルクウィストは物語を提示している。

以上のように、ホルクウィストは、自己と他者とでは根本的に主体を把握する方法が異なっていること、加えて、「私」という存在は他者のように予め与えられていないため「私」はつくられ共有されるべき出来事であること、そして、自己の制作には時間軸を区切り、価値の一貫性を保ちながら物語として表現することなどが必要であると述べている。ホルクウィストは、こうした視点をバフチンの著作から抽出している。しかしながら、ホルクウィストは、自己と他者の時空間的な異なりの中で展開される自己の形成の一連の流れを端的に示している一方で、自己を語るとはどのような現象を指すのか、語る内容が現実とどのように関係しているのか、といった事柄については、多くを語っていない。

2章・3章では、ホルクウィストの議論を下敷きとして、自己が語りによって形成される一連の流れについてバフチンの著作の検討を行う。そうすることによって、自己が他でもない語りを通してのみ形成されうるという事実が浮き彫りとなるだろう。2章では、自己と他者の知覚に関する基本原理と物語行為について論述し、自己が語りという行為によって表現されていく一連の流れについて見ていく。3章では、さらに論を進めて、物語を描く段階を自己形成の観点から論じる。そこでは、2つの「世界」と2人の「私」といった存在が重要となる。

2　自己と他者の知覚に関する基本原理と物語行為

2-1　自己と他者の境界

ホルクウィスト（2002）が指摘するように、バフチンは常に空間・時間に関心を抱いていた。そのため、自己と他者についても、時間及び空間の認識論の観点から論じている。バフチンは、一人ひとりの身体は異なる物理的空間に位置しているばかりではなく、一人ひとりは異なる認識論的時間・空間におり、世界及び互いを見つめていること、同じ出来事に直面した場合でも、一人ひとりが異なる出来事として受けとることなどを指摘していた。自己と他者の知覚の根源的な異なりが、自己と他者の決定的な差異となるのである。バフチンは出来事を認識する

際の、この異なる視野について、次のように述べている。わたしたちの瞳には二つの異なる世界が映っており、誰かと向かい合うとき、私は相手と共に同じ物を見たりすることができるが、相手の顔や相手の背後にある状況などのように相手には見えないような物や関係をも捉えることができる（バフチン1999：145）。もちろん相手も同様の状況にある。私たちは、こうした異なる互いの視覚野を合わせて状況や出来事を認識している。ダイアロジズムが地と図のような相補的な自他関係を前提にしている背景には、自己と他者のこうした時間と空間の異なりがある。

バフチンは、次のように自己と他者の時間的境界の異なりについて述べている。

> 他者の生の時間的境界が与えられていること…、他者の完結した生への価値的なアプローチそのものが与えられていること…、死という、あり得べき不在というしるしの下に他者を知覚すること――このような与件が、生を、こうした境界の内側での生の時間的流れのすべてを稠密にし、そのフォルムを改変する条件となるのである…。境界が与えられるとき、その中で生はまったく違ったふうに配列され、形づくられる。それは、結論がすでに見いだされ与えられている…ときには、いまだ結論を模索しているときとは違ったふうに、われわれの思考の過程が叙述されるのと同じである。…
>
> 空間的境界と同じく、わたしの生の時間的境界もまた、それが他者の生にとって持っているようなフォルムを組織するという意義を、わたし自身にとっては持たない。わたしが生きる、すなわち考え、感じ、行為するのは、自分の生の意味的系列においてであって、目の前にある生の、完結させられうる時間的全体の中でではない。…存在の中で、世界の中で、わたしの心が外側からどのように見えるかをわたしは知らない。（バフチン1999：244-245）

ここで述べられていることを整理すると以下のようになる。バフチンは、生の時間的境界が他者と自己とでは異なること、その違いは自己の死を見ることができないという点にあることを述べている。他者というのは、死という地点を設定して限りある時間の中に位置づけ眺めることができ、また、実際に他者の姿を知覚することができる。他者の時間的流れは稠密であり、有限の時間の中で他者を捉える。また、他者の生は完結しているため、価値づけすることが可能である。これに対して、自己の生には時間的境界はなく、したがって、有限の時間の中に位置づけすることはできず、自己の姿を知覚することもできない。自己の生は未完結のままである。自己の終わりを見ることができないので、自分の思考や行為を、「始め――中間――終わり」という時間軸を設定して捉えることができない。生の時間的境界が他者には存在し、自己には存在していないのである。このことが、自己を存在させることを困難なものとしている。私たちは、物語るという行為によって世界を認識している。物語行為とは、「時間的に離れた複数の出来事を指示し、それらを〈始め――中間――終わり〉という時間的秩序に沿って筋立てる（plotting）言語行為」（野家2005：326）である。物語的な「始め――中間――終わり」という時間を設定して世界を眺めるということは、日常で行う世界制作としての行為であるが、自己に関しては、こうした物語行為の対象となる以前に何らかの手続きが必要となる。なぜならば、自己を有限な時間の中で眺められないということは、物事を整序立てることができない、つまり、自己を整序立てることができないということになるのである。さらに、意味づけ、価値づけすることは、時間軸上に物事を整序立てて初めて可能になるので、自己を有限な時間の中に置くことができないということは、自己に対する価値づけもできないことを意味する。では、自己を自己として存在させ、物語ることを可能とするにはどういった手続きが必要なのか。この点について、次に検討していこう。

2-2　他者の眼をもつ自己

以上で見てきたように自己と他者の知覚のあり方には、根本的な差異が存在する。そして、自己は未完結であるがゆえに、主体性と確固たる輪郭をもった存在へと形成されなければならない。では、捉えどころのない自己にどのようにアプローチするのか。「始め――中間――終わり」という時間軸の中で出来事を整序立てて自己に意味を与えること、つまり「私」という出来事をつくり上げていくことは可能なのだろうか。それを可能にする方法は、自己を他者

として見る、ということである。

> 私が自己を意識し、自己自身となるのは、ただ自己を他者に対して、他者を通じて、そして他者の助けをかりて開示する時のみである。…存在するとは、即ち他者に対して、他者を通じて自己に対して、存在することである。人間には彼が主権をもっているような内的な領域は存在しない。彼の全存在は常に境界にあり、自己の内面を見ることは即ち他者の眼を見ること、あるいは他者の眼で見ることなのである。（バフチン1988c：250）

> 自分を表現するとは、他者にたいしても自分自身にたいしても、自己を客体とすることである。（バフチン1988b：206）

バフチンがここで述べているのは、他者の視点を持ち込むことで「始め――中間――終わり」という有限な時間の中に自己を置くことができ自己を認識することができること、そして、自己を記号によって客体化し、他者及び自己に対して存在を示していくということである。自己に対して存在を示すというのは、自己がある一定の形として形成されたということを自らが認識していくことを指している。他者の眼を使って自己を見るという作業によって、他者と同様の時間と空間、つまり、整った均一な時間と自分の姿を把握できるような空間を得ることができる。こうして、自己について物語として語ることが可能となる。

では、他者の眼を通じて自己を見るとは、どのようなことだろうか。自己について語る人物、自己物語を制作する作者は、「他者の視点を持った私」ということになるが、この人物とは一体誰を指すのだろうか。これについて、バフチンは、伝記に関する議論の中で次のように述べている。

> 伝記の作者――それは、実生活で何よりも容易にわたしたちの心を占める、つまり、わたしたちが鏡に自分を映したり、おのれの名声を空想し生の外的な見取図を構想したりする際に、わたしたちと共にある、あのありうべき他者なのである。それはわたしたちの意識に浸透して、わたしたちの行為、評価、自分を見る眼を、わたしたちの自分にとってのわたしと並んでしばしば指摘する、ありうべき他者なのである。…自分の過去を思い出すときにしばしば能動性を発揮するのがこの他者であって、彼の価値的トーンでわたしたちはみずからを回想するのである（幼少時の思い出のばあい、それはわたしたちの内に凝固している母親である）。（バフチン1999：300）

「伝記の作者」とは、常日頃私たちの心を占めている「ありうべき他者」であり、これが自己について語っている人物となるのである。幼少の自分を振り返る場合では、当時の自分と密接な関わりを持っていた母親が、自分の心の中にいる他者として表れ（母親の声をもった自分の中にいる他者）、当時の自分を評価する。バフチンが述べている伝記の作家、ありうべき他者とは、私自身を監視する私の意識の中の他者のことを指している。自己物語を制作する他者の視点をもった私とは、このありうべき他者のことなのである。それに対して、「自分にとってのわたし」とは、「ありうべき他者」とは異なる性質のものである。通常、家族、国民などの集団の中で自分を位置づけて平穏に過ごしている場合は、「ありうべき他者」は「自分にとってのわたし」と葛藤を引き起こさない（バフチン1999：301）。このような状況では、「ありうべき他者」は権威ある価値的立場を持ち、「自分にとってのわたし」がこの他者と内的に完全に一致しているため、私の生について物語ることができる（バフチン1999：301）。しかし、「ありうべき他者」が心を占めるときには、「自分にとってのわたし」をそっくり純粋な姿で解放することは難しく、この他者との間に葛藤や闘いが始まる（バフチン1999：301）。

上記の内容は、社会学では自己と他者の問題として扱われてきた。自己とは自らの内部にも他者を内包する存在であり、理性的、自律的であるためにしばしば自己の内の内的他者との対話が必要となる（西原2003：27）。子どもの発達場面では、内的な声は、養育者である母や父などである。内的な声は、自己の内の内的他者の声であると同時に、そもそも他者の声である（西原2003：27）。ここで、ミードの「I」と「me」（ミード1973）を用いて、バフチンの考えを整理しよう。自己はIとmeという2つの相補的な自己によって成り立っている。他者の態度を取得す

る中で、自己を反省的に見る過程で自己 me が生じ、me は他者の態度の中に位置づけられた自己意識である（片桐2011：67）。これに対し、I とは、ある状況に対して自己を主張し、自由とか自発性を伴って未来への運動を進める自己を指す（ミード1973：189, 190, 212）。つまり、me は対象化された自己、I は行為する過程としての自己である（片桐2011：67）。バフチンの述べている「自分にとってのわたし」は I であり、「伝記の作者」「ありうべき他者」は me となる。回想という作業が伴う自己物語の制作に際しては、この me が作者となるのである。

本章では、自己と他者の時間と空間の認識の異なり、自己の未完結性、他者の眼を通して自己の物語を制作することなどを検討してきた。バフチンが示してくれた重要な観点は、自己を有限な時間の中に置くということであった。それは、「始め ── 中間 ── 終わり」という時間軸を自ら設定し、物語的時間の中で「私」という出来事を形づくることを意味していた。他者を認識するときと同じように、自己を組織立てて認識することが求められるのである。バフチンはこのような形で、物語を通して自己が制作されることを示していた。

3　語りと自己形成

次に、自己について語るという行為を踏まえて、物語を描く段階について自己形成の観点から考察する。本章では、（A）実在の世界と物語世界という 2 つの世界、（B）2 つの世界にいる 2 人の私、（C）2 つの世界の相互作用、2 人の私の相互作用、の 3 つについて順を追って検討を行う。これらを見ていくことで、「自己についての語りが自己を形成する」という現象の内実を明らかにすることが可能となるだろう。

（A）（B）（C）でのキー概念は、クロノトポスである。クロノトポスとは、時間的関係と空間的関係との本質的な相互連関、つまり、時空間のことである（バフチン1987, p.7）。物語るという行為を、バフチンはクロノトポスの観点から論じている。

3-1　（A）実在の世界と物語世界という 2 つの世界

バフチンは、物語るという行為において、以下のような 2 つの世界の存在を指摘している。

> 描かれた世界は、それがいかにリアリスティックで真実らしかろうとも、この描かれた世界の創り手である作者が居る、描き出す実在の世界と、クロノトポス的に同一視することは不可能である。（バフチン 1987：343）

> この実在の世界は、テクストを創り出す世界と呼ぶことができる。なぜなら、テクストのうちに反映されている現実も、テクストを創り出す作者も、テクストを実演する者も…最後に、テクストを復活させ、この復活の過程でテクストを新たにする聴き手・読者も、すべてが、テクストのうちに描き出される世界の創造にひとしく関与するからである。作品（テクスト）のうちに描き出される世界の、反映された創り出されたクロノトポスも、この描き出す実在のクロノトポスに由来するのである。
> すでに述べたように、描き出す実在の世界と、作品のうちに描き出された世界とのあいだには、明確で原則的な境界が走っている。…しかし、この原則的な境界を、絶対的で越境不可能なものと考えること（単純化されたドグマ的な特殊崇拝）も、同じくまったく承認しえない。（バフチン 1987：337-338、下線筆者）

バフチンは、一つの世界を「描かれた世界」「作品のうちで語られる出来事」「作品（テクスト）のうちに描き出される世界」、もう一つの世界を「描き出す実在の世界」「物語るという出来事そのもの」「テクストを創り出す世界」と呼び、物語るという行為にはこの 2 つの世界が存在するという。前者を物語世界、後者を実在の世界と呼ぶこととする。そして、この 2 つの世界は、クロノトポスの観点からは、明確に異なることが主張されている。クロノトポス的に異なる世界とは何か。2 つの出来事という視点が 2 つの世界の存在を示している。

> われわれの前には、二つの出来事がある。作品のうちで語られる出来事と、物語るという出来事そのものが（この後者の出来事に、われわれ自身も聴き手・読者として参加する）。（バフチン 1987：340-341）

語られる物語世界では物語のクロノトポスがあり、

いつ・どこで何が起こるかなどの物語の時間・場所が設定されている。一方、物語を制作している実在の世界では、例えば、誰かと対面しているといった相互行為が進展している状況があるわけだが、この出来事は物語世界の出来事とは異なる時間・場所で生起している。「作品のうちで語られる出来事」と「物語るという出来事そのもの」とは、こうした異なるクロノトポスを構成しており、それぞれの出来事はそれぞれの世界のクロノトポスの内で起っているのである。こうした2つの世界のクロノトポスの差異は決定的であるものの、実は、別の観点から見ると、2つの世界は重なり合い、相互作用し合っている。破線部はそのことに言及している部分であるが、この点については3-3で詳述する。

また、実在の世界と物語世界の位置関係としては、実在の世界が物語世界を包摂する構図となっている。作者、聞き手、読者といった全ての人が、物語世界の創造――クロノトポスの創出――に等しく関与している。物語世界のクロノトポスというのは、作者、聞き手、読者のいる実在の世界のクロノトポスに由来しているのである。相互行為の進展する実在の世界のクロノトポスを基盤として、物語世界は構築されている。

3-2 (B) 2つの世界にいる2人の私

(A) では、クロノトポス的に異なる2つの世界の存在を述べた。これを踏まえて、(B) では、そうした2つの世界に存在する「私」について見ていこう。

> 作者は、時間・空間の世界とそこでの出来事を、あたかも自らその世界と出来事を目のあたりにし観察したかのように、あたかも自らがあらゆる所に居た目撃者ででもあるかのように、描き出すことができる。たとえ自伝を書き、一点の虚構もふくまぬ告白を記す場合でも、同じように、作者は、自伝や告白を創り出す者として、そこに描かれた世界の外にとどまる。私が自らの身にたった今起ったばかりの出来事について語る（記す）場合でも、この出来事について語る者としては、私は、すでに、この出来事が起った時間・空間の外に居る。語る者としての《私》と、語られる者としての《私》とは、絶対に同一視できない。（バフチン 1987：342-343）

先述のように、クロノトポスの観点から、2つの世界が存在している。そして、その2つの世界それぞれに、「私」が存在している。物語世界には語られる私（登場人物）がおり、実在の世界には語る私（作者）がいる。それぞれの私は、それぞれのクロノトポスに位置している。自伝を書く場合でも、日常で人が自らの身に起こった出来事について語る場合でも、全ての作者は物語世界のクロノトポスの外にいる。そして、語る者としての私と、語られる者としての私という2人の私は、クロノトポス的に同一視することはできない。

以上、(A) 及び (B) を通して、物語行為の原則として、物語世界と実在の世界という2つの世界が存在し、そして2人の「私」が存在するということを論じた。このことを踏まえ、次に、2つの世界の相互作用、2人の私の相互作用について言及する。

3-3 (C) 2つの世界の相互作用、2人の私の相互作用

自己について語るという行為を考えたとき、(A) (B) のみを見ると、一つの疑問が生じる。例えば、自分の身の回りに起きたことなど自分の体験を他者に伝え、聞き手に理解してもらい共感を得るということは日常的に生じている。物語世界の中の私と今語っている実在の世界という2人の私、あるいは、物語世界と実在の世界という2つの世界とが、クロノトポスの観点から重ならないのであれば、聞き手に自己の物語を理解してもらうことなどできないはずである。(A) (B) からは、語りによって自己の形成が可能になるとは言えない。つまり、クロノトポスの違いを踏まえた上でもなお、2つの世界の間、2人の私の間に、何らかの方法で接続が可能である、ということが言えなければ、自己についての語りという行為自体が成立しなくなるのである。

では、2つの世界の関係、2人の私の関係を見ていこう。この点について、バフチンは、自伝という領域の作者と主人公の関係を説明している。

> 伝記において作者は、主人公と信仰、信条、愛を同じくするばかりではない。その芸術的な創造（混淆的な）において作者は、主人公がその美的な生のなかで従うのと同一の価値に従うのである。…伝記において作者は無邪気（ナイーブ）である。彼はその血脈で主人公とむすびついており、両

> 者は互いに位置を交換しうる（ここから、実際に人格上の一致をみる可能性、つまり自伝というものが生じるのである）。（バフチン 1999：314）

異なる２つの世界にいる２人の私は、クロノトポス的には異なりつつも、その一方で、価値という地平において、両者は繋がる。物語世界にいる語られる私と、実在の世界の話し手である語る私とは、共に同じ価値地平におり、世界と関わり、世界を経験している。つまり、２人の私が価値的に重なるということは、２つの世界の価値的な重なりを生むのである。では、この点については、先ほどの（A）破線部の続きを見てみよう。

> すでに述べたように、描き出す実在の世界と、作品のうちに描き出された世界とのあいだには、明確で原則的な境界が走っている。…しかし、この原則的な境界を、絶対的で越境不可能なものと考えること（単純化されたドグマ的な特殊崇拝）も、同じくまったく承認しえない。描き出された世界と描き出す世界とは、決して合流し得ず、両者の間には原則的な境界が決して廃棄されることなく存続するにもかかわらず、双方の世界は、互いに分かちがたくむすびつき、絶えず相互に作用しあう。両界のあいだには、たえず交換がおこなわれる。…作品も、作品のうちに描き出された世界も、現実の世界のうちに組み込まれ、現実の世界を豊かにする。いっぽう現実の世界も、作品と作品のうちに描き出された世界のうちに組み込まれる。（バフチン 1987：337-339）

クロノトポスは異なりつつも、２つの世界は互いに影響を与えながら展開されていく。物語世界が実在の世界に組み込まれ、実在の世界も物語世界に組み込まれる。こうした２つの世界の相互浸透性の背景には、先述したように、２人の私が同一の価値観を持っているということがある。

このように、自己について語るという行為においては、クロノトポスの異なる２つの世界と、その世界にいる２人の私が存在している。２人の私が価値的に重なり、２つの世界が価値的に重なる、という現象が起きているのである。このような自己と自己の世界の一貫性は、話し手と聞き手との信頼関係構築の観点からは、強く求められる。

4　結びにかえて

本稿では、語ることによって自己・現実が構成されるということを、「自己について語る」、「語りが自己を形成する」という２つの段階に分けて検討してきた。「自己について語る」という現象は、自己と他者の時間と空間の異なりを基盤として、未完結の私を出来事として形づくる必要性から生じていた。そして、自己について語る方法とは、他者を認識するときと同じように自己を組織立てて認識すること、つまり、自己を有限な時間の中に置いて物語的時間「始め――中間――終わり」を設定することであった。バフチンは物語的に自己を制作することを示していたのである。「語りが自己を形成する」という現象は、クロノトポスの異なりから生じる２つの世界及び２人の私の存在が、価値的に重なることを指していた。この価値的な重なりなくしては、どのような物語として描かれるべきかを自らが認識することはできず、また、他者に対しても、自ら選びとった筋書きで自己を語ることはできない。２つの世界が相互作用し合い、２つの自己が重なることで、その語り手は物語に基づいた安定的な自己を獲得する。こうした動的な自己制作の過程は、対話と言い換えることもできる。対話とは、二人の人間の間で「A→B」として、あるいは、内的な対話として自己の中で「A → A'」として、行われるものである（Holquist 1981：427）。自己について語るという行為は、この２つの種類の対話――自己から他者へ、自己から内的自己へ――を同時に行わなければならない高度な言語活動なのである。

参考文献

Bakhtin, M. M., Edited by Michael Holquist. Translated by Caryl Emerson and MichaelHolquist.（1981）. *The Dialogic Imagination: Four Essays*. Austin, University of Texas Press.

Bruner, J. S.（1986）. *Actual Minds, Possible Worlds*. Cambridge, Harvard University Press.（= 1998, 岡本夏木他訳『可能世界の心理』みすず書房 .）

Bruner, J. S.（1990）. *Acts of Meaning*. Cambridge, Harvard University Press.（= 1999, 岡本夏木他訳『意味の復権――フォークサイコロジーに向けて』ミネルヴァ

書房 .）
Holquist, M.（1981）. Glossary.（In）Bakhtin, M. M., *The Dialogic Imagination: Four Essays*. Austin, University of Texas Press.
Holquist, M.（2002）*Dialogism : Bakhtin and his World*. London, Routledge.（＝1994, 伊藤誓訳『ダイアローグの思想──ミハイル・バフチンの可能性』法政大学出版.）
Pavlenko, A. and Lantolf, J.（2000）Second language learning as participation and the（re）construction of selves. In Lantolf, J. P.（ed.）*Sociocultural theory and second language learning*. Oxford University Press, pp. 155-177.
浅野智彦（2001）『自己への物語論的接近──家族療法から社会学へ』勁草書房
片桐雅隆（2011）『自己の発見──社会学史のフロンティア』世界思想社
西原和久（2003）『自己と社会──現象学の社会理論と「発生社会学」』新泉社
野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波書店
バフチン, M. M.，北岡誠司訳（1980）『言語と文化の記号論』新時代社
バフチン, M. M.，北岡誠司訳（1987）『小説の時空間』新時代社
バフチン, M. M.，佐々木寛訳（1988a）「ことばのジャンル」新谷敬三郎他訳『ことば対話テキスト』新時代社 pp.113-189.
バフチン, M. M.，佐々木寛訳（1988b）「テキストの問題」新谷敬三郎他訳『ことば対話テキスト』新時代社 pp.193-239.
バフチン, M. M.，伊東一郎訳（1988c）「ドストエフスキー論の改稿によせて」新谷敬三郎他訳『ことば対話テキスト』新時代社 pp.241-278.
バフチン, M. M.，望月哲男他訳（1995）『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房
バフチン, M. M.，佐々木寛訳（1999）「美的活動における作者と主人公」伊東一郎他訳『ミハイル・バフチン全著作 第1巻』水声社 pp.87-369.
マッキンタイア, A.，篠塚榮訳（1993）『美徳なき時代』みすず書房
ミード, G. H.，稲葉三千男他訳（1973）『精神・自我・社会』青木書店
リクール, P.，久米博訳（1990）『物語られる時間Ⅲ』新曜社